

TOKYO KAIKAN

2019年1月8日（火）

東京會館はレストラン・バンケット・ウエディングを有する複合施設として、これまで愛されてきた伝統の味やおもてなしの心はそのままに、新たに生まれ変わります。

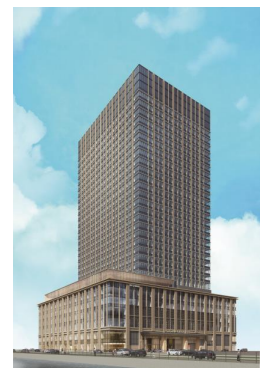


約100年の歴史を受け継ぐ意匠と空間づくりへの想い 「伝統とモダン」が息づく場所

1922年、“世界に誇る施設ながらも、誰でも気軽に利用できる、人々が集う社交場”として皇居の目の前に開場した東京會館。ルネッサンス様式の荘厳な外観や、一面大理石が続くロビー、大シャンデリア3基を備えたバンケットなど、壮麗な建物が憧れの的となりました。

二代目本館は、モダニズム建築を牽引した谷口吉郎氏が設計し、1971年に竣工。煉瓦色のタイルの外観や、ロビーとメインバンケット一面に設置された壁画、丸い大きなシャンデリアなど、モダンな建築様式が評判となりました。

2019年、新たに生まれ変わる東京會館は、“新しくて伝統的”というこれまでにないコンセプトをもつ施設となり、これまで愛されてきた建築・インテリアも随所にご覧いただけます。



東京會館新本館

ワールドクラスの設備とホスピタリティを誇り、 レストラン・バンケット・ウエディングを有する複合施設

2019年1月8日（火）、新たに生まれ変わる東京會館は、東京駅・日比谷駅・有楽町駅・二重橋前駅の地下コンコースへ直結する抜群のアクセス利便性を誇る皇居の目の前、東京・丸の内エリアに開場。新規2店を含む8店舗のレストランとショップ、丸の内地区最大級となる1,800名様へのパーティに対応する大バンケット、皇居を一望できるチャペルや複数のバンケットを有する複合施設です。

INTERVIEW

ここからまた 新たな東京會館の歴史が始まる

2019年1月8日（火）、新たに開場する新本館。建設の陣頭指揮を執ってきた渡辺訓章社長に、生まれ変わる東京會館についてインタビューしました。

伝統を大切にしながら、
違いを生み出し変化し続ける

**一本館の完成が近づいています。
今のお気持ちをお聞かせください。**

待ち遠しく、新しくなった東京會館にお客様を早くお迎えしたい、その気持ちでいっぱいです。

新本館が開場する「丸の内二重橋ビルディング」は、東京會館・三菱地所・東京商工会議所による3者共同プロジェクトです。スケールを十分に活かした造りになっており、設備も世界に誇れる施設になっていると自負しているので、お披露目できる日が本当に楽しみです。

一本館の注目ポイントは？

3者共同ビルになっても東京會館と一目で分かっていただけのように、顔となるファサードには、絵柄が異なる特別なフォーシーズンズレリーフ20枚を施しました。

当初は全て同じ絵柄を想定していましたが、異なる絵を楽しんでいただけるよう、私の変更を提案しました。ほかにも、これまでお客様に愛されてきた初代本館からの意匠を随所に取り込むなど、建物やインテリアにこだわっています。また、眼前に緑溢れる皇居が広がる独自性はぜひ注目していただきたいです。

さらに、東京會館の伝統的なレストラン「プルニエ」には、伝統の味を更に革新的に強化するため、創業以来初めて外部からシェフを招きます。伝統の味はそのままに、現代のフランス料理が融合した新メニューもお楽しみいただけます。また、ショップや新たにオープンするレストランを含めた全体のブランディングは柴田陽子事務所に依頼、ウェディングは、テイクアンドギヴ・ニーズと提携、当社経営幹部を外部から招聘するなど、大きなチャレンジもしています。



代表取締役社長 渡辺訓章

1982年、株式会社東京會館入社。
2004年本館宴会支配人兼婚礼支配人、
07年本館総支配人兼宴会支配人、15
年取締役本館開設準備室長を経て、
2017年4月より現職。

一伝統を重視しながら、大胆な変化にも挑むのですね。

1920年当初の設立理念は「世界に誇る施設ながらも、誰でも気軽に利用できる、人々が集う社交場」です。私は常にこの設立理念を持ち歩き、大切にしています。この変わらぬ理念を軸に、お客様には「真に価値あるもの」をお届けしたい。伝統の味やインテリア、おもてなしはそのままに、お客様から選ばれ続けるための違いを生み出し、変化し続けることが必要だと考えています。

一新生東京會館への想いをお聞かせください。

まずは新生東京會館を東京一の施設にし、皆様に真の満足を提供したいと考えています。2022年には創業100周年を迎えます。今後も生き残っていくためには新生東京會館の成功を軸に、さらなる発展を目指していきます。

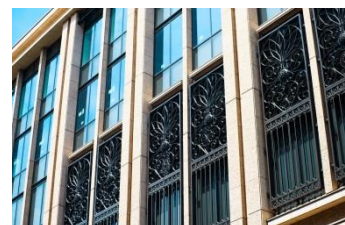
新本館のファサードを彩るのは、 デザインがすべて異なるフォーシーズンズレリーフ

東京會館新本館ファサードの上部壁面72mにわたって設置されるフォーシーズンズレリーフには、初代本館に施されていた様々な模様を凝縮したデザインを再構成しました。

初代本館にモチーフとして数多くみられたユリの花や、内装にあしらわれていた植物のモチーフ、庇（ひさし）や手すりのパターンなどを上下に施しています。

中央のハート型には四季を象徴する桜、向日葵、トンボ、鶴などの動植物をモチーフにし、20枚すべてが異なるような工夫を凝らしました。

また、新本館の庇は初代本館の庇を元にデザインし重厚感を出しています。これは象徴的な模様の一つとして、お客様用エレベータ等の内装にも使用しています。



新本館ファサード「フォーシーズンズレリーフ」



- | | | | | | |
|---|------|------|-----|-------|-----|
| 春 | | | | | |
| | 桜 | 梅 | 藤 | タンポポ | 蝶々 |
| 夏 | | | | | |
| | 向日葵 | 朝顔 | 睡蓮 | カタツムリ | 桔梗 |
| 秋 | | | | | |
| | 月下美人 | コスモス | トンボ | 彼岸花 | 菊 |
| 冬 | | | | | |
| | 椿 | 蘭 | 水仙 | 鶴 | 福寿草 |

HISTORY & DESIGN CONCEPT

伝統を継承する、東京會館の歴史

初代本館から二代目、そして新本館へ。約100年におよぶ歴史と培われた伝統に、新しい風を吹き込みます。

■「社交の殿堂」を具現化

初代本館は、1920年（大正9年）4月から約2年6ヶ月かけ、1922年に開場しました。田辺淳吉氏・草間市太郎氏の設計による、ルネッサンス様式な外観が特徴的で、隣接の帝国劇場が「文化の殿堂」、東京會館は「社交の殿堂」と称されるようになりました。

二代日本館は、モダニズム建築を牽引した谷口吉郎氏が設計。煉瓦色のオリジナルタイルを製作し、壁面や内装に使用するなど、“クラシックのなかのモダン”な建築様式が評判となりました。三代目となる新本館にも、伝統の継承を大切にしたい思いが、正面玄関をはじめ随所に込められています。



初代本館（1922～1970年）



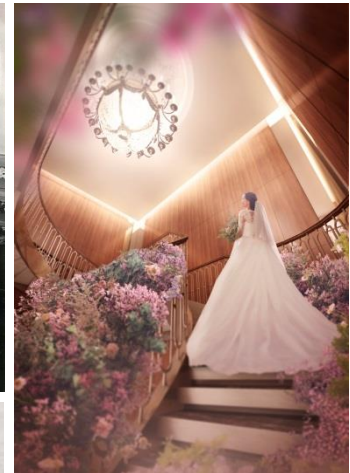
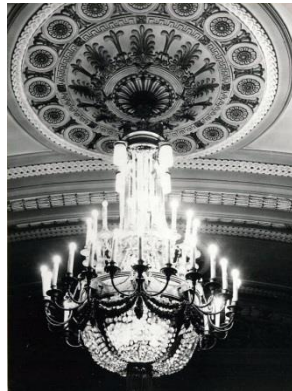
二代日本館（1971～2015年）



東京會館新本館

■東京會館の象徴「大シャンデリア」

初代本館の「大宴会場」（ローズルーム）の天井には、3基の大シャンデリアが並んで設置されていました。荘厳な佇まいは、東京會館のシンボルとして、格調高い「大宴会場」を印象づける存在に。その華麗さと豪華さで東洋一と謳われた大シャンデリアは、チェコ製で約1tもあり、現在では作ることができない部品も多い貴重な品。初代本館建替えの際に、1基は二代日本館の12階エレベーターホールへ移設され、ウェディング写真撮影のベストポイントとして人気に。なお、1基は文化財として博物館明治村へ寄贈され、もう1基は修理用の部品として解体、保存されています。新本館では、螺旋階段に設置し、花嫁姿を美しく演出する撮影場所として継承されて参ります。



（左上）初代本館時の大シャンデリア
（左下）吊元の装飾はコースターに採用
（右）新本館では螺旋階段に設置

■二代日本館のシャンデリア「金環」の意匠も新本館へ

二代日本館を設計した建築家・谷口吉郎氏が、自由な作風で知られる芸術家・猪熊弦一郎氏に依頼し、二代日本館の象徴となったのが、「金環」と呼ばれるシャンデリアとモザイク壁画でした。新本館では、「金環」はレプリカで再現し、モザイク壁画は修復した上で設置します。



二代日本館ロビー。奥がモザイク壁画



新本館ロビー（貫通通路）に、金環とモザイク壁画を設置

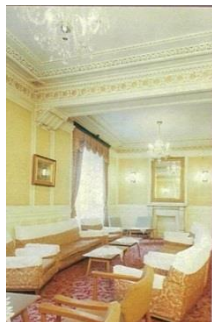
TOPICS

建築・インテリアの魅力

テーマは、クラシックな優雅さに日本のエッセンスを融合した「KAIKAN CLASSIC」。初代の意匠を継承し、ここにしかない特別な場所をつくります。

■「記憶の継承」がテーマの貴賓室

皇室をはじめとした公賓・国賓をもてなしてきた貴賓室。二代目に引き継ぐ際にも再現の様子が話題になりました。マンツルピースやシャンデリア、ミラー、ドアノブなどは、修理を施し新本館にも設置されます。またデザインは、二代目本館よりもさらに初代本館に近づけて再現いたします。



初代本館「貴賓室」



二代目本館
「コレニアールーム」



新本館「バイオレットルーム」

■大宴会場「ローズルーム」の変遷

戦後GHQのアメリカ人将校が、初代本館「大宴会場」の天井を見て、ほのかなピンク色の装飾がバラのように美しいと称賛し、以降ローズルームと呼ばれるようになりました。二代目本館では、脇田和氏製作の壁画を設置。新本館では、ローズピンクの絨毯にバラの花模様を取り入れ、下から見上げるとバラの花に見えるシャンデリア、壁には折り紙で作ったバラの花をイメージした照明を設置します。



初代本館「大宴会場」
(ローズルーム)



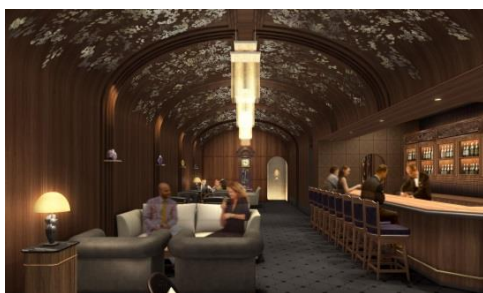
二代目本館「ローズルーム」



新本館メインバンケット「ローズルーム」には、脇田和氏の絵画も設置

■95年の時を刻み続ける手巻きの大時計

創業当初より初代本館ロビーに設置されていた大時計。丁寧にネジを巻くことから1日が始まっています。二代目本館ではバーロッシニに。新本館ではメインバーに設置し時を刻みます。



新本館メインバーの壁中央で時を刻む大時計

■文豪も注目したコレニア大理石

初代本館のロビーの柱に使用されたのが、約6億年前の貴重な藻の化石「コレニア大理石」です。深い緑色で、その渦状の模様は天津蛇紋と呼ばれ、作家・井上靖氏の著作『化石』のモチーフとして登場します。二代目本館を経て、新本館では、1階ロビー壁面の一部でご覧いただけます。



コレニア大理石



井上靖氏

MOVIE

本ニューズレター「建築物・インテリア」をテーマに、大正時代より“東洋一”と謳われた約1tの大シャンデリアにスポットをあてたオリジナル動画を5月23日（水）より公開します。

<https://bit.ly/2KyMTRX>

制作 有限会社柴田陽子事務所、村上洋平



「東洋一の大シャンデリア」
(約2分)

<本件に関するお問い合わせ先>

東京會館新本館開場PR事務局（株式会社サニーサイドアップ 内） 担当：伊東（070-3115-6481）、小井戸（080-4163-1261）
TEL：03-6894-3200 FAX：03-5413-3050 E-mail：tokyokaikan_pr@ssu.co.jp
HP：https://www.kaikan.co.jp/ FB：https://www.facebook.com/tokyokaikan/

SPECIAL INTERVIEW

これまでも、これからも。 紡がれ続ける「東京會館とわたし」

2018年の本屋大賞も受賞され、今をときめく人気作家の辻村深月氏。
実は東京會館とご縁が深く、小説『東京會館とわたし』も執筆していただいた辻村氏に執筆時のエピソードや東京會館新本館に寄せる想いをお話いただきました。

直木賞記者会見を見守る 職人魂光る煉瓦色のタイル

芥川賞・直木賞の記者会見で受賞者の背後を飾ってきた煉瓦色のタイルは私にとって特別なものです。煉瓦の素朴な色合いがより良いということで、急遽裏面を表面として使用することにしたりと小説執筆のための取材時に伺いました。大規模な建設事業にも関わらず、細部にまでこだわり抜き、時には綿密な計画を覆して変更を加えていく姿勢にグッと来ました。以来、人の温かみがこのタイルに感じられて、直木賞受賞の際も、その壁に見守られているような安心感がありました。そんなプロ意識で支えられる格式高いお部屋で直木賞の会見に臨み、作家冥利に 尽きる思いがしたのを覚えています。



第147回直木賞（2012年上期）受賞会見で煉瓦色のタイルに見守られているようだったという辻村深月氏

「きっと。お幸せになって」 戦時中の花嫁へのおもてなし

上巻第三章「灯火管制の下で」の戦時中に結婚式を挙げた方のお話はほぼ実話なので、細やかな出来事の1つ1つに心動かされました。例えば、式の最中にアメリカの偵察機が上空に現れ、警報が出た際、式は中断せず、会場の窓から見えなように黒いカーテンを引いてスタッフだけが緊張しつつ見守っていたと伺いました。また、結婚式当日が旦那様と初対面で不安の多い中、介添えの方が「きっと。お幸せになってくださいね」と新婦の手を握ってくださったそうで、その温かさを新婦の方は90歳を迎えた今でも覚えていらっしゃるそうです。実はこの介添えの方が、皇太子殿下御成婚にあたり、美智子様の美容担当を拝命した3代目の遠藤波津子さんだということにも驚きましたが、結婚式というハレの日を支えるおもてなしの素晴らしさに何より感動しました。一方で、スタッフの方は「当たり前のことをしていただけですから」とおっしゃっていらして、さすが東京會館だと思いました。



辻村深月氏
1980年山梨県生まれ。
2004年デビュー後、11年『ツナグ』で第32回吉川英治文学新人賞、12年『鍵のない夢を見る』で直木賞、18年『かがみの孤城』で2018年本屋大賞を受賞。その他著書多数。

100年愛され続ける東京會館が 新本館へ受け継いでいくもの

小説執筆時、今はもう見られない大正時代の東京會館のことを伺い、今度は新本館の開場に立ち会えるということで、時代の目撃者になったようで大変光栄に思います。東京會館にはマニュアルがないようですが、それ故に、マニュアルを超えた、血の通ったサービスが生まれ、この場所が100年愛され続けているのだと私自身10年東京會館と関わる中で実感しました。作品としての『東京會館とわたし』は完結しましたが、新本館でもこうした東京會館を形作るDNAのようなものが継承され、作品以上に素晴らしいそれぞれの『東京會館とわたし』が紡がれることを願っています。私自身も家族と共に東京會館新本館でかけがえのない思い出を重ねていきたいと思っています。



東京會館とのご縁が続く10年間

辻村深月氏と東京會館との出会いは10年前の2008年。挙式会場を検討する中で、料理の美味しさや歴史ある建物の重厚感、皇居を一望できる素晴らしい眺望に心を掴まれたのが始まりです。芥川賞・直木賞の記者会見が行われる憧れの場所だということもあり、東京會館で結婚式を挙げられました。その際、担当のウェディングプランナーとの間で、「いずれ、直木賞の時に帰ってきます」、「お待ちしております」というやりとりがあり、約4年後、直木賞を受賞し再び東京會館を訪れると「おかえりなさいませ」とスタッフに出迎えられ感動。以来、東京會館とのつながりが深まり、東京會館を舞台にした小説『東京會館とわたし』執筆していただく運びとなりました。

2018年本屋大賞を受賞した際のことを振り返って辻村氏は「まるで身内のようにお祝いしていただきました。特に若い方には敷居が高く感じるかもしれませんが、1度ご縁ができることとても大事にさせていただいて、格式高いけど、アットホームで、それが東京會館だと思います」とお話しいただいています。



『東京會館とわたし』
(辻村深月著/毎日新聞出版)

東京會館のお料理にはメニューひとつひとつにストーリーがあります。
皆さんも、そのドラマと、このおいはぜひ召しあがっていただきたいです。

